

滞在させてくれる程の家庭でさえ、非常に質素で堅実な生活と営んでいることがわかる。ほんの三日間の滞在中ですら、その堅実ぶりに「なるほど」と感心することがいくつあつたのだから、一年、二年となればその差は大である。生まれた時から、こういう両親の姿を見て育つ欧米の子ども達と、あの粗大ごみの山を生んでいる日本の親を見て育つ子ども達とを比べた時、その差に愕然とするのは、決して私ひとりではあるまい。近頃は「もつたない」という言葉を耳にすることが少なくなつたように思う。子どもは勿論、大人もあまり使わなくなつたのではないだろうか。むしろ「今どき古くさい」という感覚の方が強いかもしれない。しかし「消費は美德」といつていた時代は終わり、そのつけが社会にも教育の中にもはつきりと現われている今日、私は自分が欧米で体験したことをより多くの人に知ってもらいたいと思う。そして何かと捨てようとしている人に「ちょっと待って」と声を掛け、「捨てること」が及ぼす影響の大きさについて、もう一度考えてもらいたいと思うのである。

## 私の場合の

「捨てる」とは

赤羽美代子



私は、昨夏、東トルコへ旅をしました。

20日間の旅を無事に終えて、帰国の途に着く時、私の頭の中に「真実と、捨てるは、互いに向き合っている」と云う思いが、ごく自然に、頭の中でふくらみ始めました。

連日、40度近くの猛暑の旅でしたが、一日一日が織りなす生活は、私を夢中にさせました。古い遺跡については、云う迄ありませんが、東トルコの子どもたち、お

となたちの生きざまに、魅了されたのです。

子どもたちからは「全力を発散する喜び」が伝わってきます。その笑顔・純真な、貧しくも美しく澄んだ眼に圧倒され続けました。黒曜石のような輝きを持った目、はね返るような、しなやかさを持った人びとの心の動きは、何処から来たの？ 何に困ってなの？ と、自分の心を、わくわくと踊らせておりました。

この旅は、私に一つの事を教えてくれたのです。それは「捨てる」と云う事です。

旅行中に出会った、幾つかの体験を記してみます。

旅の途中、私どもの一行のひとりが、高い山頂で、脳溢血で倒れました。登り下りの不自由な場所にもかかわらず、現地の人びとの、ねんごろな処置と、惜しめない労力に全員、ただ感謝でした。行ないと、真実を持って愛し合う「共に生きる」と云う言葉が、実感として、しみじみと身にしみました。

又、私は、パスポート・全財産の入ったバックを、ホテルのレストランに置き忘れて、タクシーで街に出ました。しばらくして、それに気づいた時の私の困惑ぶりを知った、街の人びとの真剣な、木目、細やかな行き届い

た好意と、多くの人びとの善意は、いつ迄も忘れる事ができません。バックが、手元に戻った時の、気持ち良い感激。その上、彼等は目に見えた御礼を、受け取ってはくれませんでした。私の喜びの心の上に、街の人たちの大きな喜びの心を、乗せてくれたのです。

又、砂漠の中を、我々を乗せたバスが疾走中、珍しく汽車が通過しました。急ぎ、下車して、パチパチと撮影を始めると、突然、汽車は、勢いよく、もくもくと黒い煙を吐き出しました。ピーポー、ピーポーと汽笛を鳴らし、撮影のでき映えが良いように、色取りを添えてくれたのです。煙は長く尾を引いて残り、汽笛の音は余韻を残して、汽車は走り去って行きました。思いも寄らぬ汽車からの歓迎を受けて、私たちは、汽車の姿が遠く消えるまで、手を振り、お礼の意を表わし、その好意に答えたのです。メルヘンの世界にいる自分を感じ、思わず「時間よ止まれ！」と声が出ました。暖かい東トルコの人たちとの、交流のひとつでした。

あの事、この事、数えきれない大・小の心の暖まる体験と素朴な真実に直面しました。

この国の人びとと「共に生きる」生活の中で、私の心

は「ハタ」と立ち止まったのです。真実の前に立たされた時、中途半端な自己意識は捨てなければ、東トルコの古い伝統・人びとの誠意が、見えなくなると戸惑ったのです。

私は勝手に「欠くべからざる物」と思い込んだ物質・精神の両面を、身・心に詰め込み、消化しきれずに、喘いでいたのです。ましてや、旅行中は、不自由な思いを避ける為に、必需品・不要品までも、しっかりと身に着け、背負い、その重さにも、頑張ったのです。又、自分は、日本を代表している人物のように、緊張した行動など、ぐたぐたとした精神的な事柄が邪魔になり始めたのです。あれも、これもゴチャ混ぜにした私であってはいけなかったのです。そこで決心して、物質類は整理し、精神面は東トルコの砂漠の中に捨てました。

その時から、何を吸収し、何を捨てるかの価値基準が見えて来たのです。具体的な愛の好意に直面して、真実と真正面に向き合った時、澄んだ心で、はっきりと本物を見分ける力が生まれました。自分が空しくされた時、心の垢が捨てられたのです。身も心も軽くなり、透き通った目・耳で歴史に触れる事ができました。

文明の垢を、しっかりと身につけて、又、注意深く身の安全を計り、旅に出た私でしたが。

それにつけても、私の身から、バナナの皮でもむくように、不要品をむき取り、捨てていったら、一体、中身から、どんな私が出てくるでしょう。どんなに小さくても良いのですが、ピャーと輝くダイヤモンドのような私でしょうか？ いーえ、ちっぽけな銀の粒？ 銅？ 鉛？ 「大変お気の毒ですが、なーんにも出てきませんでした。中身は「がらんどう」です」と、云う事になるのでしょうか？ 困った事です。

東トルコの古い遺跡と歴史に魅せられ、人びとの素朴な優しさに支えられて、短い旅を終えました。

東京の生活は、秩序と混沌が入り交じった複雑な生活が、強いられますが、もう、遮二無二、突き進むだけの生活は終了します。（中身が「がらんどう」に終わらない為にも）

真実の前に裸になり、神様が指し示す狭い道を、広びろと歩む旅に、出発したいのです。そろそろ旅仕度を調べていきたいと願っているのです。

（靈南坂幼稚園）